

令和5年度 文京区議会建設委員会 視察報告書



▲ITOMACHI HOTEL 0 中庭にて

視察概要

1 視察日程

令和5年12月6日（水）～7日（木）

2 視察先及び目的

- (1) 今治市クリーンセンター「バリクリーン」（愛媛県今治市町谷甲 394 番地）
「21世紀のごみ処理施設モデル」に関する調査・研究
- (2) ITOMACHI HOTEL 0（愛媛県西条市朔日市 250-7）
「日本初のゼロエネルギーホテル」に関する調査・研究
- (3) 松山市（道後温泉及び松山城周辺）
「みんなで歩いて暮らせるまちづくり（街路整備）」に関する調査・研究

3 視察参加者

委員長	名 取	顕 一	
副委員長	小 林	れい子	
委 員	ほかり	吉 紀	
委 員	依 田	翼	
委 員	豪 一		
委 員	宮 本	伸 一	
委 員	品 田	ひでこ	
委 員	西 村	修	
同 行	有 坂	和 彦	（資源環境部リサイクル清掃課長）
随 行	小 野	光 幸	（区議会事務局長）
随 行	杉 山	大 樹	（区議会事務局議事調査担当主査）

「21世紀のごみ処理施設モデル」に関する調査・研究

1 視察先名称

今治市クリーンセンター「バリクリーン」

2 視察日時

令和5年12月6日（水）15時～16時30分

3 視察目的

「21世紀のごみ処理施設モデル」に関する調査・研究

4 視察先対応者

今治市市民環境部市民環境政策局環境施設課

課長：浅海 文明 氏

係長：宮脇 順一 氏



浅海 文明 氏



宮脇 順一 氏



▲今治市クリーンセンター「バリクリーン」で説明を受ける様子

5 施設概要

(1) 今治市クリーンセンター「バリクリーン」とは

今治市クリーンセンター「バリクリーン」（以下、「バリクリーン」という。）は、平成30年から稼働している今治市で唯一のごみ処理施設であり、以下の3つの柱からなる「今治モデル」をコンセプトとしている。



①廃棄物を安全かつ安定的に処理する施設

②地域を守り市民に親しまれる施設

③環境啓発、体験型学習及び情報発信ができる施設

▲施設外観（バリクリーン公式HPより引用）

ごみの資源回収やごみ焼却熱を利用した高効率発電など、循環型社会の形成を推進するほか、災害時における避難所機能や、体験型学習ができる環境啓発機能を兼ね備えた施設である。

(2) 施設の基本情報

名 称	今治市クリーンセンター	
愛 称	バリクリーン	
所 在 地	愛媛県今治市町谷甲 394 番地	
建 物	地下1階、地上4階建て（延べ床面積 16,981 m ² ）	
敷地面積	約 36,700 m ²	
施設概要	① 可燃ごみ処理施設	
	施設規模	174t/日（87t/日×2炉）
	処理対象物	燃やせるごみ・リサイクルセンターからの可燃残渣・助燃剤（脱水汚泥）
	処理方式	焼却方式（ストーカ式）
	発 電	ごみ焼却の熱エネルギーを利用し発電
	再資源化方法	焼却灰の一部をセメント原料として再利用
	② リサイクルセンター	
	施設規模	41t/5h
	受入対象物	燃やせないごみ・粗大ごみ・プラスチック製容器包装・資源ごみ・有害ごみ・危険ごみ
	処理方式	破碎・選別・圧縮・梱包・一時保管
運 営	今治ハイトラスト（株）	

(3) 設置までの経緯

平成 17 年 1 月	今治市及び越智郡 11 町村との広域合併
平成 18 年 8 月	「一般廃棄物（ごみ）処理基本計画」策定 （ごみ処理施設を 4 施設から 1 施設へ集約する方針）
平成 19 年 8 月	新ごみ処理施設建設候補地を「大西町宮脇」に選定したが、 その後、平成 22 年 4 月に白紙に
平成 22 年 9 月	新ごみ処理施設建設地の決定
平成 26 年 4 月 ～平成 30 年 3 月	建設工事
平成 30 年 4 月	施設稼働

(4) 契約情報

設計・建設・運営管理を民間委託する DBO 方式を採用しており、（株）タクマを代表とする企業グループが受託している

① 建設工事請負契約

契約金額：127 億 9,800 万円（税込み）

期 間：平成 26 年 2 月 24 日～平成 30 年 3 月 31 日

② 運營業務委託契約

契約金額：100 億 4,400 万円（税込み）

期 間：平成 30 年 4 月 1 日～令和 20 年 3 月 31 日



▲今治市 3R 推進イメージキャラクター

まだ使えるケン（犬）「あーるん」（今治市公式 HP より引用）

6 施設の特徴

公害基準	国の基準よりさらに厳しい公害防止基準値を設定し、周辺環境の保全に配慮。
ごみ発電	ごみを焼却した時に発生する熱を利用し、発電（定格出力 3,800kW）を行い、施設全体の消費電力を賄うとともに、隣接する公共施設等へ供給。さらに、余剰電力は売却。
防災拠点	万全の耐震・免振対策を実施し、停電時においても、ごみ発電により安定して電気を賄う。また、管理棟は、災害時に 320 人の市民が安心して避難できる場所として活用し、非常食や飲料水を備蓄。
環境啓発	施設見学者が楽しみながら学ぶことができるよう、見学者ホールの開放、工場の中身が見え、体験できる施設。

本施設は、最先端の処理技術により、廃棄物を適正かつ安定的に処理するだけでなく、ごみの資源回収やごみ焼却熱を利用した高効率発電など、循環型社会の形成を推進することを特徴としている。

また、災害時における避難所としての機能を備え、地域を守る防災拠点としての役割も果たす。

さらに、ごみ処理工程の見学コースや環境啓発コーナーなどを設置し、環境学習等を通じて地球環境や循環型社会への理解が深まることで、市民の環境保全に向けた取り組みにつなげているとともに、平時には地域の活動拠点としても開かれ、年間 2 万人が訪れる住民から親しまれる施設となっている。



▲可燃ごみピット等見学の様子

7 質疑応答

- Q： 防災拠点機能を兼ね備えているとのことだが、どのような機能が具体的に教えてほしい。また、防災訓練を行う頻度や内容についても教えてほしい。
- A： 主な防災機能としては、320 人の市民が避難できる施設、避難者が7日間生活できる備蓄機能、非常用発電機器の設置、生活用水を供給できる地下水高度処理設備、生活排水を1週間貯蓄できる排水貯蓄などがある。
- Q： フェーズフリーアワード 2022 の Gold を受賞されているが、フェーズフリーの観点におけるどのようなポイントが評価されたのか。
- A： ごみ処理施設に新たな価値を創出し、日常は年間約2万人が集う憩いの場として、非常時は市の指定避難所として、「いつも」と「もしも」の両方で地域に貢献しているところだと考える。
- Q： 平成30年7月豪雨の災害ごみ処理について、その経験と課題について伺う。
- A： プラットフォーム作業員に災害廃棄物処理経験者を配置したことで、円滑な受入れ・処理が出来た。分別が不十分な混合ごみは、プラットフォーム内で重機と手選別にて異物を除去した後、破碎・焼却した。課題は、大規模災害時の仮置場の確保・運営、円滑な初動対応、人材確保などが挙げられる。
- Q： 「脱炭素」のための取り組みを教えてほしい。
- A： ごみ焼却熱を利用した発電を行い、施設内及び近隣の公共施設に電気供給を行っている。余剰電力の内 FIT 分については、四国電力送配電へ売電。また、非 FIT 分については、一部を高橋浄水場、今治下水浄化センター、片山水源地の3施設へ自己配送にて送電し、自己託送分を除く電力については、地域新電力会社へ売電している。その他、業務用車両として電気自動車を利用。
- Q： 避難所としては320人の収容とのことだが、どのような想定か
- A： 段ボールパーテーションが2m×2mで2人用の広さ。これを160個備蓄しているので320人。ただ、通路も広くスペースを取っているため、実際に大きな地震が起きたら1,000人以上は避難できると思う。
- Q： 平時はごみの収集する車両の出入りがあるが、一方で、市民の活動拠点として一般市民の出入りもあるが、導線の安全性は確保されているのか。
- A： ごみの集荷車両の道路と一般市民のアクセスする道路は分けてあり、安全性を確保している。周回道路も30km/hでご協力をお願いしている。
- Q： 当初の建設候補地が白紙となり、その後、現在の候補地が決定している。地域住民とどのようなやりとりがあり、建設後の反応はどうか。
- A： 地域住民への理解を得るために徹底して説明会を開催し、何度も訪問するなど丁寧な対応に努め、理解を得ることができた。建設後の反応は180度変わり、良いイメージを持って頂くことができています。また、建設に伴い、施設にアクセスするための市道を新設することで、生活上の利便性向上にもつながり評価を頂いている。

Q： 地域住民への情報発信はどのように行なっているのか。また、住民向けのイベントなどの開催はあるのか。

A： 「リサイクル通信」に定期的に掲載している。また、「いまばり環境フェスティバル」を実施して今年は1,800人の参加者があり好評だった。また、今年の夏休みは「クールシェア」として、多目的室を自習室として開放し多くの利用者があった。

Q： 市町村合併後、ごみ処理費用は削減できたのか。

A： 施設集約前は約10億円で、バリクリーン稼働後は委託料や残渣の最終処分費用、セメント材料に使う（引き取り）費用などで約7億円となり、約3億円の削減となった。

Q： 島にあるごみは船で運ぶのか。

A： しまなみ海道を渡り、車で運ぶ。関前地区については広島県呉市に委託している。

Q： 温水プールを併設するところもあるが、案はなかったのか

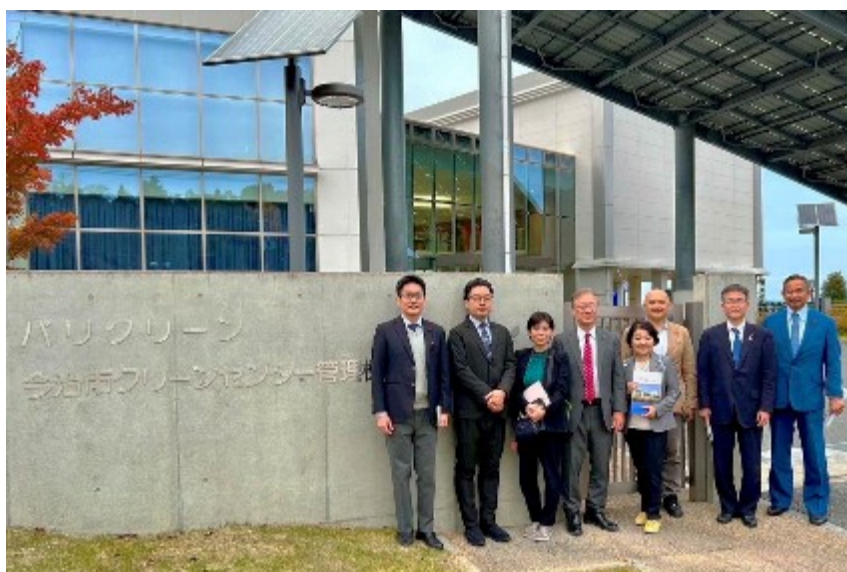
A： 旧クリーンセンター時は、隣接する温浴施設に蒸気を供給していた。現施設は、熱利用は発電だけにした。

Q： プラごみの取り扱いを教えてください。

A： 平成30年4月のバリクリーン稼働後、製品プラや汚れたプラは燃やせるごみとして処分しているが、容器包装のきれいなプラごみは資源化を始めている。

Q： 焼却灰はどのように処理されているのか。

A： 年間6,000トン排出されるうち、半分の3000トンは山口県宇部市のセメントプラントへ。800トンは自前の最終処分場へ、残った分は民間処分場へ委託料を払って処分している。



▲バリクリーン入口にて

「日本初のゼロエネルギーホテル」に関する調査・研究

1 視察先名称

ITOMACHI HOTEL 0

2 視察日時

令和5年12月7日（木）午前10時～11時30分

3 視察目的

「日本初のゼロエネルギーホテル」に関する調査・研究

4 視察先対応者

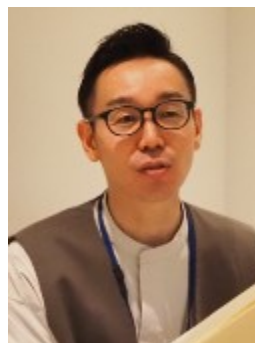
株式会社アドバンテック サステナブル事業部愛媛事務所

課長 星川 正幹 氏

株式会社 GOODTIME GENERALMANAGER 河井 直幸 氏



星川 正幹 氏



河井 直幸 氏



▲ITOMACHI HOTEL 0で説明を受ける様子

5 施設概要

(1) ITOMACHI HOTEL 0 とは

令和6年5月に愛媛県西条市にオープンしたITOMACHI HOTEL 0は、建物に省エネルギーと創エネルギーの機能を同時に備えることで、ホテル運営において実質的な電力エネルギー消費しないゼロエネルギーホテルであり、日本国内のホテルで初めて、環境省が定める「ZEB」認証を取得している。

同ホテルは、株式会社アドバンテックが開業し、株式会社GOODTIMEが企画・運営を担っている。

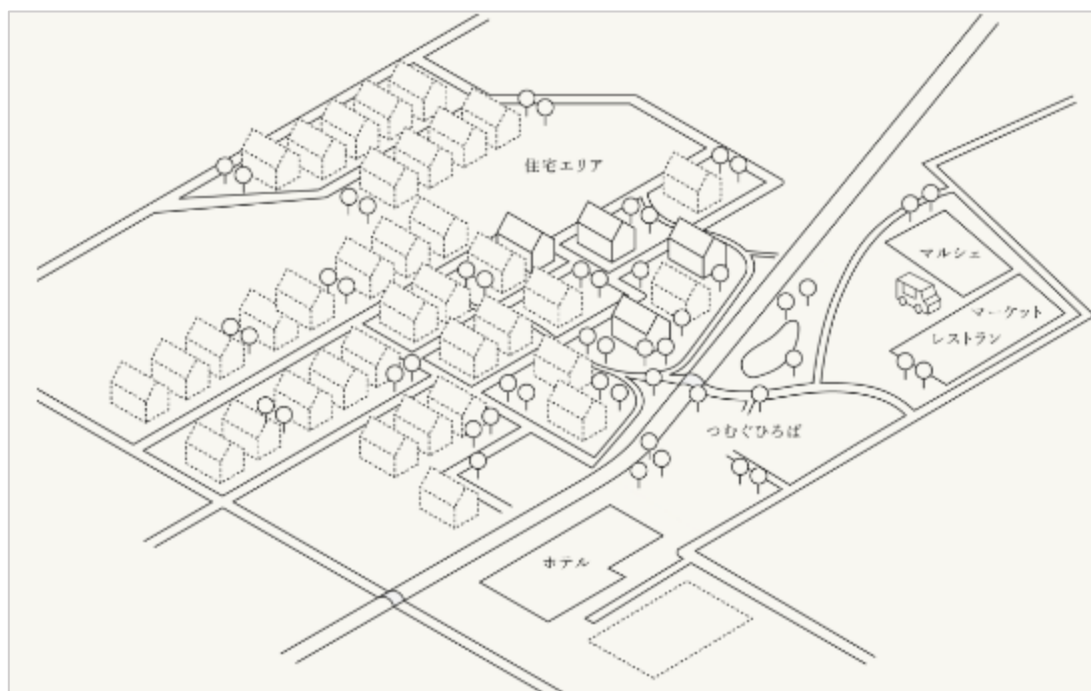


▲ホテル外観 (ITOMACHI HOTEL 0 公式HP より引用)
©Yoshiro Masuda

(2) 「いとまち」について

ITOMACHI HOTEL 0は、西条市の新たな賑わい創出を目指すため、株式会社アドバンテックのまちづくり事業として開業した「いとまち」の敷地内に建設されている。

「いとまち」では、ホテルのほかに住宅ゾーン、マルシェなどの商業ゾーン、広々とした芝生と噴水がある広場がある。



▲いとまち全体像 (ITOMACHI HOTEL 0 公式HP より引用)

ITOMACHI HOTEL 0の建物設計は、建築家の隈研吾氏が主宰する隈研吾建築都市設計事務所が手がけている。また、「いとまち」のマスタープランは、東京大学隈研吾研究室が、西条市民とのワークショップを重ねながら構築していった。

(3) 施設の基本情報

名 称	ITOMACHI HOTEL 0 (いとまちほてるゼロ)
所 在 地	愛媛県西条市朔日市 250-7
建 物	地下2階(南棟)、地上1階(北棟/東棟)(延べ床面積 2,999 m ²)
客 室 数	57室(南棟 50室/北棟 7室)
事 業 主	株式会社アドバンテック
設 計	隈研吾建築都市設計事務所
企画運営	株式会社 GOODTIME

(4) ホテル設立の経緯とゼロエネルギーの取り組み(星川氏より説明)

- ・元々、株式会社アドバンテックは、主要事業が「半導体関連機器」のメーカーであったが、リーマンショック後、経営方針を転換し、景気に左右されないよう、新規事業の一環として太陽光発電等のサステナブル事業部を展開することになった。
- ・西条市出身の山名正英社長が、市内に約6.6haの空地を見つけ、西条市のまち再生を目的に、脱炭素社会に寄与しながら人の賑わいを生み出し地域活性化につなげる「糸プロジェクト」事業を計画し、平成28年から始動した。
- ・当ホテルがテレビ番組で大きく取り上げられたこともあり、全国の議員、首長、各市の環境・建設関係者の視察が殺到している。
- ・今では、事業主の故郷への強い思いやプロジェクトが少しずつ認知されつつ、市と地元住民と共に成長の兆しが出てきた。
- ・マルシェや公園広場では、休日には地域住民や家族連れで賑わうようになった。
- ・エリア内は、ホテルの屋根(300kW)、マルシェ・レストラン屋上(140kW)の太陽光パネルによる発電施設でエネルギーを自らつくり出している。(設備容量440kW)
- ・防災に強いまちにするため、西条市と災害応援協定を結んだ。災害時には72時間防災拠点800人分の避難所を提供する。
- ・四国電力から電力を引き込んだ後の敷地内は自営電線を敷設し、7,200kW蓄電池、EV車、ガス発電機からの廃熱利用など、電気、水、食を提供する用意がある。
- ・施設の運営と共に分散型電源の実証実験を行っている。



6 ホテル館内の特徴



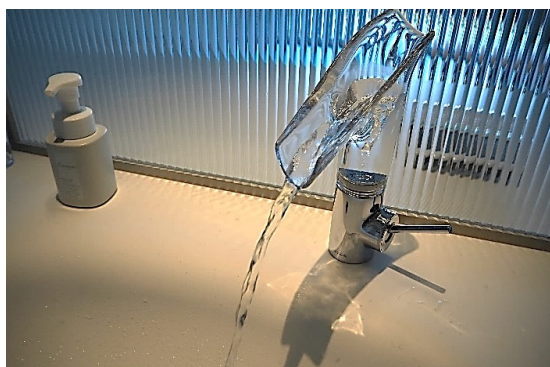
- ・地元クリエイターのアート展示など、愛媛・西条の魅力を再発見できるような館内演出に。
- ・館内や客室のインテリアは、「伊予青石」の青みがかかった薄い緑の色合いをキーカラーに。
- ・自然の恵みや地域の循環から生まれる地元ならではのアメニティ等を用意。



「水の都」西条市では、広範囲に地下水の自噴井があり、この清らかな湧き水は「うちぬき」と呼ばれており、ホテル敷地内にも「うちぬき」の水場がある。

西条市公式 HP（西条の名水「うちぬき」について）

<https://www.city.saijo.ehime.jp/soshiki/kanko/utinukil.html>



客室にも「うちぬき」をイメージした透明感あふれる高級水栓を採用。



▲ホテル朝食（ITOMACHI HOTEL 0 公式 HP より引用）

朝食は、愛媛の旬の野菜や果物がたっぷり、メニューは全て管理栄養士の監修で体に優しい。

7 質疑応答

Q： なぜ、西条市に省エネ・創エネの「ZEB 化ホテル」をつくろうと考えたのか。

A： 自社の太陽光発電事業を展開する中で、自治体とまちづくりの支援もしてきた山名社長が出身地である西条市に貢献したいとの思いから、相談役として建築士隈研吾氏と「再生プロジェクト」を一緒に進めた。また、東京大学隈研吾研究室の学生と地元住民でワークショップを開催して地元ニーズや意見要望をプロジェクトに活かした。

Q： ホテル開業以来の実績や成果及び今後の課題は。

A： インバウンドや ZEB 化に関心のある脱エネルギー関連団体の視察や問い合わせは多く頂いている。ホテルの稼働率は、土日や三連休は 90%以上だが平日はまだまだ課題だ。

Q： まちづくりとしての「糸プロジェクト」に行政はどのような関りがあるのか。

A： 市民緑地認定制度を活用し、西条市が敷地内の川の護岸を整備。弊社は紡ぐ広場を市民緑地として 20 年間市に提供し、地域の賑わいを創出している。

Q： 今後のいとまち計画の進め方や課題について。

A： 3 年経過したが認知度がまだ低い。行政との関りで事業展開したい。

Q： 省エネ（50%）+創エネ（50%）の電気量（kW）はどのくらいか。

A： 再エネ 351,983kWh/年、創エネ-395,623kWh/年で、合計エネルギー消費量-43,640kWh/年。

Q： 太陽光発電装置やパネルの耐用年数とリサイクル等はどうしていくのか。

A： NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）が 1970 年頃、西条市で太陽光電池・発電のテストを行った結果「実用化が可能」という結論を見出した。その際使用した太陽光発電装置を地元四国電力が引き取って 50 年経っても未だに稼働している。パネルの寿命も長期に使い続けられるはずである。

Q： ホテルとマルシェの面積はどのくらいか。

A： 当地は市の用途地域の条例で「田園住居地域」に指定されており、建築は 3,000 m²が限度であるため、ホテルが 3,000 m²、マルシェが 2,900 m²とした。川の西部分と東部分は、ちょうど 1 万 m²ずつになる。

Q： なぜ営利を目的した貴社が、「カーボンニュートラル」事業を選択したのか。

A： 2050 年に「カーボンニュートラル」実現を国は目標にしているので、企業として先行して脱炭素ビジネスを選んだ。

みんなで歩いて暮らせるまちづくり（街路整備）」に関する調査・研究

1 視察先名称

松山市（道後温泉及び松山城周辺）

2 視察日時

令和5年12月7日（木）12時45分～16時40分

3 視察目的

みんなで歩いて暮らせるまちづくり（街路整備）」に関する調査・研究

4 事業概要

松山市では、本格化する人口減少や少子高齢化などの環境変化のなか、持続可能な都市づくりを目指し、都心部の機能強化や生活拠点の形成などコンパクト・プラス・ネットワークを推進しており、「松山城」や「道後温泉本館」などの観光資源や、商業・業務機能などが集積する中心市街地では、安全に歩いて、健康で、生き生きと暮らせる、そして「賑わい」を生み出す空間の創出を目的に、都市機能を高める拠点とネットワークの整備を進めている。



▲都市機能を高める拠点とネットワーク（松山市公式HPより引用）

(1) 松山城周辺（ロープウェー街）

観光拠点である松山城に登るための玄関口となるロープウェイ通りは、平成11年に無電柱化を行う路線に位置付けられたことを契機に、道路空間が整備された。

車道を2車線から1車線に減らし、歩きやすい歩道空間を整備することに加え、「ロープウェー街まちづくり協定書」及び「ロープウェー街まちづくりガイドライン」を締結し、沿道の店舗看板デザインの統一化、外壁色の修景等が実施された。

上記の取り組み結果、整備後は歩行者が約3.5倍に増加した。



▲ロープウェー街を視察する様子

(2) 道後温泉周辺地区

ロープウェー街と同様、観光拠点である本地区についても歩行者のための空間が狭かったことが課題であったため、歩行者空間を増大させる道路整備が進められ、平成21年に整備が完了した。整備前は、自動車の流入が多く、歩行者と自動車が錯綜していたため、自動車の主動線変更のほか、以下3点の整備を行った。

- ・ 広場の中に道後温泉を配置
- ・ 街路整備はカラー舗装にとどまらず、道後温泉へのアプローチを景観演出
- ・ 駅前にはエントランス部分として景観演出

また、本地区においても、「景観まちづくりデザインガイドライン」を策定し、ファサード整備等が進められた。



▲道後温泉周辺整備前（左）、整備後（右）の様子（松山市HPより）

視察を終えての感想

視察を通じて感じたこと

名取 顕一 委員長



今治市ごみ処理施設「バリクリーン」では、施設の検討を行っている時に東日本大震災があり、防災機能を充実させ、市民320人が避難できる施設と避難者が7日間生活できる備蓄量品を用意しており、日常は年間2万人が集う憩いの場として、非常時は市の指定避難所として「いつも」と「もしも」の両方で地域に貢献している点が優れていると感じた。こうした地域貢献を意識した施設の考え方を、区の施設更新の際には提案していきたい。

日本初のゼロエネルギーホテル「ITOMACHI HOTEL 0」では、ホテルに留まらず、約2万坪の敷地にマルシェや、レストランを併設しすべてが再生可能エネルギーを使用していこうというコンセプトで街づくりを目指している。西条市という沸き水の街の特徴を最大限生かしているところに共感した。区の施策に生かせる点があるかをしっかり検証していきたい。

松山市の「みんなで歩いて暮らせるまちづくり（街路整備）」については、観光資源を生かし、その街歩きを回遊しやすくするために歩道の拡張、車道の減少、無電柱化を進めていることに区での観光資源をどう生かしていくべきか非常に参考になった。

視察を終えて

小林れい子 副委員長



「ごみ処理」や「脱炭素」など、環境課題の解決には地域住民や企業の協力が不可欠であるが、「防災」をキーワードに成功している事例があり、今回、視察をする機会に恵まれた。

その一つは、平成17年の市町村合併を機に4つのごみ処理施設を集約し、市の唯一の施設として誕生した「今治市クリーンセンター・バリクリーン」だ。誘致に至るまで、当初の予定地が地域住民の反対で白紙になり、現在の場所にも何度も足を運んで話し合い、苦労を重ねた。ところが現在の「バリクリーン」は、通常は年間2万人が集う「憩いの場」として、災害時には320人を収容できる「防災拠点」として地域に貢献しており、地域住民から大変喜ばれている。

二つ目は、日本初のゼロエネルギーホテル「ITOMACHI HOTEL 0」。省エネ・創エネによる電力消費の実質ゼロを実現し、ZEB 認証を取得。災害時には約 800 人分の非常用電源・水・食を提供できる「防災拠点」となる。事業主体の株式会社アドバンテックは、国内外の取引先からの「脱炭素」への要望を見据え、先行対応しているとのことだ。

文京区においても、今後、プラスチックごみの分別回収が始まり、2050 年ゼロカーボンシティを目指すことを表明している。これらの先行事例を参考にして、自治体が地域住民や企業と協働できることを探っていきたい。

建設委員会視察報告・感想

ほかり 吉紀



公設民営のごみ処理施設であるバリククリーンは、主に燃やせるごみの焼却をし、その際に発生した熱を利用し発電を行い、施設全体の消費電力を賄っている。また、隣接の公共施設への電力供給も行うとともに、余剰電力の売電により税外収入も得ている。今治市はごみ処理施設の集約により年間コストを 10 億円から 7 億円に削減することができ、売電によって年間約 2 億円の収入を得ているとのこと。併せて年間 5 億円のコスト削減は文京区でも見習う点が多いと感じた。特に税外収入を年間億単位で獲得することは文京区でも積極的に議論し取り組むべきだと考える。さらに、災害時の避難所機能として、燃やせるごみがある限り自家発電可能で、地下水の処理施設も有しているの

ので水も使用することができる。経済効果を産むとともに、自給自足のできる避難所としても稼働できる、とても魅力的な視察先であった。

ITOMACHI HOTEL 0 は、50%省エネ+50%創エネにより実質ゼロエネルギー施設として運営している。創業者の故郷である西条市のまちづくり、SDGs の観点における地方創生の取り組みとして平成 28 年から始動した。ホテルのほか、マルシェやレストランを有し、今後は施設内に温浴施設の建設も計画されているほか、隣接地域の住宅開発にも取り組んでいる。

ホテルの屋根、マルシェ・レストラン屋上の太陽光パネルにより発電を行い、余剰電力は蓄電池に蓄える。また、西条市と災害応援協定を結び、災害時には 72 時間防災拠点 800 人分の避難所を提供する。

今回の 2 か所の視察先は、ともに SDGs の観点から事業に取り組んでいた。経済効果を産むとともに、避難所などとして地域貢献の期待も大きく、文京区としても施設整備や改築の際に取り入れるべき点が多くあると感じられた。

愛媛県への視察で学んだこと

依田 翼



今回、区議になって初めて泊りがけでの委員会視察に参加し、愛媛県の今治市、西条市、松山市を見て回った。今治市の清掃工場「バリクリーン」は最新の焼却機能を持ちながら地域の防災拠点としての役割も担う点が画期的だ。普段から体育館的施設などを地域の人に利用してもらい、いざというときには避難所に転換するという。こうした公共施設の多様な使い方が今後は求められてくるのではないかと感じた。

西条市の「ITOMACHI HOTEL 0」は太陽光発電などを駆使して「ゼロエネルギー」を実現した画期的なホテルだが、同地で創業し成長した企業がマルシェ、レストラン、分譲地などを一体整備したものだ。お世話になった地域に貢献したいという企業の思いが印象に残った。今後、幅広い場所から人を呼び寄せる地域の核となることを願う。

歩いて暮らせるまちを作ろうという松山市の取り組みは大変参考になった。歩道の拡幅や無電柱化、車線の減少など先進事例が詰め込まれている。日本有数の観光地だからこそ改革が進んだ面はあるかもしれないが、お隣の豊島区でもみられるように通過交通を遮断して歩きやすい街をつくろうという機運は全国で高まってきている。文京区にも応用できる場面が多そうだ。

建設委員会視察報告書

豪 一



バリクリーンは、広々とした施設で平成30年に稼働したばかりだ。ゴミ焼却時に発生する熱で、年間23,000MWhを発電し、施設全体の消費電力を補うとともに隣接する施設等へ供給し、更に余剰電力は売却している。防災拠点としても活躍が期待され、管理棟は災害時に320人の市民が安心して避難できるように非常食や飲料水を備蓄している。土地が広いのでうらやましい。

文京区はどうする？やはり東京湾埋立地は隣接特別区のものではなく、土地に恵まれない特別区自治体に配当してもよいのではないかと。運動場や焼却炉等課題が解消する。

ITOMACHI HOTEL 0は、「日本初のゼロエネルギーホテル」を原動力とした地域のまち再生への取り組みということであるが、素晴らしい取り組みのわりに、ホテルやマルシェの創

設に拠出した事業費用費や自家発電の年間生産可能電力量や販売可能額（金額換算）や現在の年間販売金額という肝心な事が聞けなかったのも、果たして事業として独立採算がとれるのか、はたまた、国や自治体の助成や補助だのみなのかわからなかった。事業の採算計画等を伺えなかったことは残念である。

視察を終えて

宮本 伸一



バリクリーンについては、施設の特徴である「平時は市民に開放された地域拠点」と「災害時には、電気・水道の機能を完備した防災拠点」について、今後、同様の施設建設にあたって有効な視点と実感した。

また、複数の機能を兼ね備えた公共施設の建設の視点も、区の面積が狭い文京区にとっては大いに参考になった。

さらに、ごみ発電により確保した電力を平時と有事に備えて活用できる点も、公共施設の今後の在り方にとって必要なことと考える。脱炭素の建築物を目指す方向性はすでに国・都・区においても共通の方針となっているが、太陽光発電による電力確保と脱炭素の両方の視点をベースに公共施設建築の検討をしていく上で大いに参考になった。

日本初のゼロエネルギーホテルである ITOMACHI HOTEL 0 については、西条市のまちづくりの拠点として「糸プロジェクト」の柱として機能している。「省エネ」と「創エネ」で電力消費を実質ゼロにすることは、今後、文京区など都心部においての施設建設などに求められる視点であり、今後に生かせるよう研究をしていきたい。

松山市のまちづくり（街路整備）については、市のコンパクトシティの形成を目指す取り組みの1つとして、かつてシャッター通りとなった商店街を、歩道拡幅や導線確保により賑わいを取り戻すことに成功した事例を視察。文京区においても、賑わいを回復する取り組みとして、「歩いて暮らせるまち」を整備し、点在する観光資源を回る導線の確保を目指す上で大いに参考となる取り組みであり、今後のまちづくりに活かしていきたい。

今後の「まちづくり」には環境対策がマスト

品田 ひでこ



今治市バリクリーンは、市町村合併による広域ごみ処理施設ですが、一般廃棄物処理施設に留まらず新たな時代の「フェーズフリー」の考え方で、平常時は地域住民の活動拠点や環境啓発に、一方災害時には避難所機能を併せた画期的な施設でした。また、年間処理費用は、稼働当初（平成29年度）の10億円から令和4年度では7億円と各事業展開で約3割削減の成果を出している点は大いに評価できます。

「日本初のゼロエネルギーホテル」とテレビで紹介されて今回視察した ITOMACHI HOTEL 0 は、想像を超える素晴らしい施設でした。エリア内はホテル、マルシェ、レストラン

の屋上に太陽光パネル設置で発電しエネルギーを自らつくり出しています。（設備容量440kW）また、元気のない西条市地域を脱炭素社会の構築によって活性化していく計画は、事業主の故郷への強い思いが伝わり、市と地元住民と共に「まちの再生」へと取り組んでいます。コンセプトと実践に貴重な学びを得ました。

松山市内では、「道後地区の歩行者空間整備」（商店街と広場）「ロープウェイ街」の商店街再生に無電柱化整備等、実際に歩いて視察しました。観光客や市民が楽しく歩ける街の整備に積極的に取り組んでいる松山市の姿勢を体感し、歴史を感じる落ち着いた地方都市を醸し出していました。今後の「まちづくり」には環境問題の解決策を織り込むことがマストであり、住民と一緒に再生することが重要と学び、実りの多い視察でした。

建設委員会感想文

西村 修



今回は、水の都の西条と松山を視察に訪問いたしました。私の長いプロレス人生においても四国大会は年に二度または三度。多い時は4回試合が開催されこちら松山にも度々足を運び、また私の父の出身地が同じ愛媛の宇和島ということもあり感慨深い視察となりました。宇和島はみかんと雑魚天と真珠と、闘牛で有名な街であります。ここ西条市は南部に聳え立つ山々からの水脈によって地下水が溢れるほどの水が流れてくるといってお聞きしました。私が住む文京区の大塚の街も秩父山系からの透き通る水が流れてはいるものの、都会では田舎と違い公害汚染をはじめとし衛生面から、飲料

には井戸水は適さなくなってしまった近年、羨ましいばかりの自然環境に感動させていただきました。視察のホテルも、清掃工場もどちらも、防災面にも極めて特化しており、水道、電気の重要なライフラインの確保、備蓄の充実、地域の方々も共有できる多くのスペースの開放など、どちらの施設も SDGs、2050 年問題に向けた素晴らしい取り組みを実行されていました。また松山市内では歴史保存と観光文化がマッチングしたまちづくり、新鮮な魚や多くの果物や野菜の充実が、四国の素晴らしい食文化を形成されているのも見受けられました。世界中のホテルを見てきました私の厳しい視点からも大満足のいく素晴らしいホテルでした。